

日本語と韓国語における呼称の対照研究

— 親族名称の視点移動を中心に —

林 炫 情

1. はじめに

本稿は、日本語と韓国語の言語表現形式のうち、呼称語、特に、親族名称の視点移動の用法を取り上げて、両言語における言語表現形式の類似点と相違点を明らかにする。また、視点移動の構造が、両国における親族意識とどのような結びつきを持っているか考察するものである。

2. 親族名称の視点移動

両言語の言語習慣では、自己中心語である親族名称を自己（話者）ではなく、相手や第三者にその視点を移動して用いることがある。しかも、その視点を明示することなく使う用法が一般的である。例えば、日本では母親が自分の子を「お兄ちゃん」と言ったり、父親が自分の父のことを「お父さん」と言わず「おじいさん」と呼んだりする。また、韓国でも自分の子に夫や妻のことを「내 아내/nai anai/⁽¹⁾ (私の妻)」「내 남편/nai namp'yŏn / (私の夫)」と言う人はまずいない。「엄마/ŏmma/ (ママ)、어머니/ŏmŏni/ (お母さん)」「아빠/appa/ (パパ)、아버지/abŏji/ (お父さん)」などと言うのが一般である。

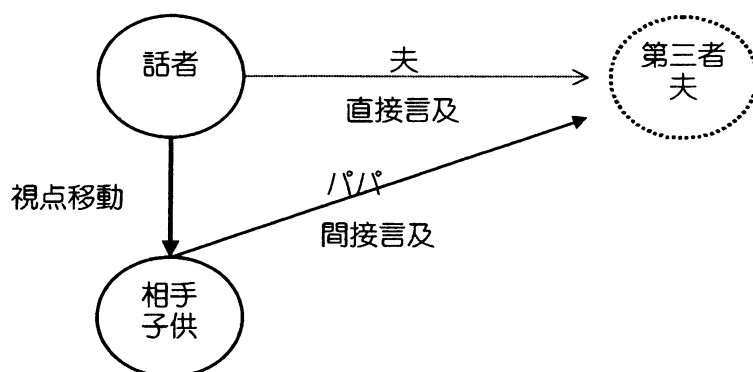
このような用法を「親族名称の視点移動の用法」と予め命名する⁽²⁾。

2. 1 相手中心的な視点移動

相手中心的な視点移動は第三者を指す他称と自分自身に言及する自称に分けて考えられる。

まず、相手中心的な他称というのは、聞き手が話し手の子供、孫・姪も含まれるが、この場合、指称対象の親族を自己中心的に称するのではなく、子供（相手）中心の関係表現に変えて言及することである。すなわち、図 I で見られるように自分の子に対して自分の夫・妻、配偶者の兄弟・配偶者の姉妹などに言及するとき、自己中心的な語の代わりに子供中心的な「お父さん、お母さん、おじさん、おばさん」などを用いることである。

図Ⅰ：子供に自分の夫について言及するとき



(夫の帰宅が遅いことについて子供に)

パパ遅いわね。

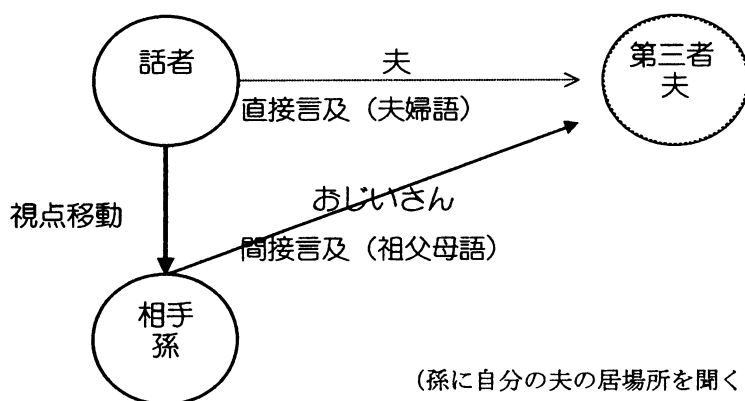
아빠 늦네. /appa nŭjne/

*夫遅いわね。

*남편 늦네. /namp'yŏn nŭjne/

このような用法は図Ⅱで見られるように、孫・姪などの目下の親族が相手になる場合も同じように適用される。例えば、話し手は孫、甥・姪、弟・妹などに対して自分の夫と妻のことを言及するときに夫婦表現の代わりに「おじいさん、おばあさん、おばさん、おじさん」などを用いる。

図Ⅱ：孫に自分の夫について言及するとき



(孫に自分の夫の居場所を聞く時)

おじいさんはどこにいるの？

할아버지는 어디에 계시니？

/harabŏjinŭn ōdie kyeshini/

*私の夫はどこにいるの？

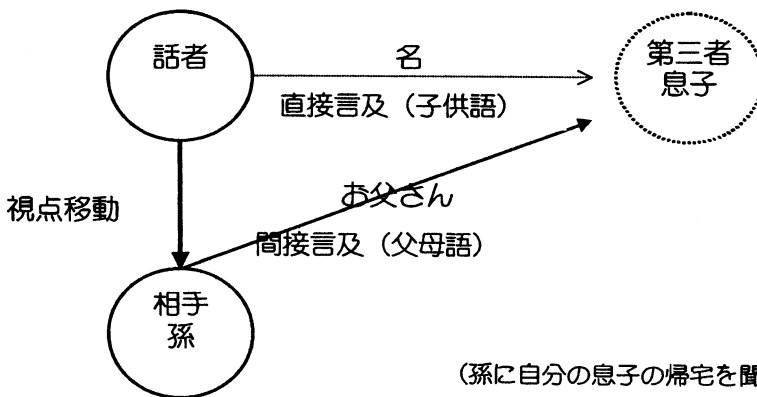
*내 남편 어디에 계시니?

/nae namp'yŏn ōdie kyeshini/

このような用法について鈴木（1973）は子供への共感的同一化、すなわち、話者は子供と心理的に同調し、子供の立場に自分の立場を同一化していると説明している。なお、子供に対して自分の父母を、「おじいさん、おばあさん」と、兄弟姉妹を「おじさん、おばさん」などと言及することは、その親族を年少者⁽³⁾（未成年者）に自己中心的に認識させ直接的な上下関係を確認させるという意味もあるといえる。

また、図Ⅲのように孫に対して自分の子、すなわち孫の父や母を呼ぶときにも「子供語⁽⁴⁾」で言わずに、「おとうさん、おかあさん」などの「父母語」を用いるのである。この場合はやはり孫と自分の息子に対する待遇が関係していると言える。

図Ⅲ：孫に対して自分の息子について言及するとき



（孫に自分の息子の帰宅を聞くととき）

お父さんはまだ帰ってきてないの？

아버지는 아직 오지 않았니?

/abŏjinŭn ajik oji anassni/

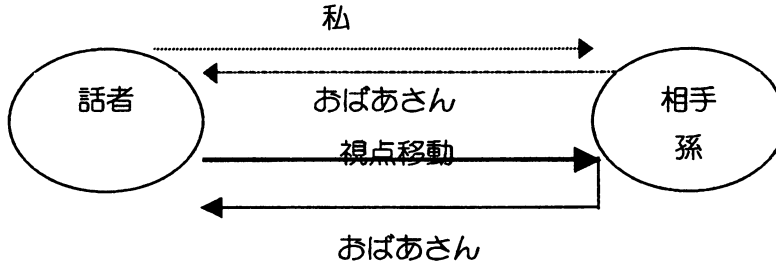
*私の息子はまだ帰ってきてないの？

*내 아들은 아직 오지 않았니?

/nae adŭrŭn ajik oji anassni/

さらに、相手中心的自称においても、相手が未成年者の目下の場合、話者は図Ⅳのように自分を相手の視点による親族語で言及する。

図Ⅳ:孫に自分のことを指して



(孫に自分のことを指して)

おばあさんがやってあげる。

할머니가 해 줄께.

/harmõniga hae churk'e/

?私がやってあげる。

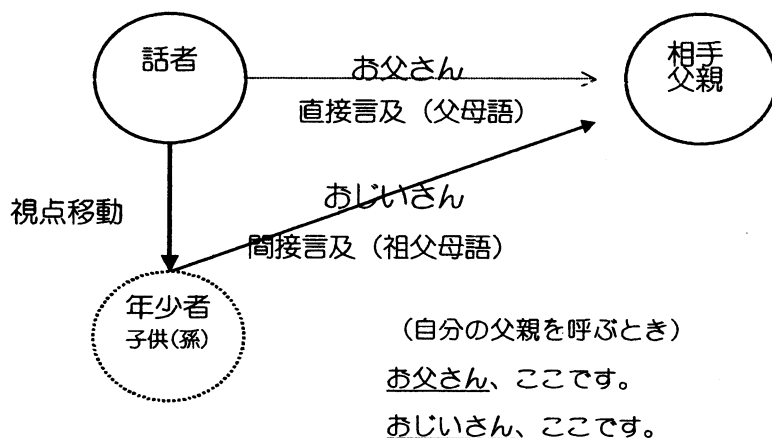
?내가 해 줄께 /naega hae churk'e/

父や母は、自分の子を相手に、自身に言及するとき「わたしが、わたしの」などの一人称代名詞を使う方法と「おとうさんが、お母さんの」などの親族語を使う方法がある。しかし、日韓両言語の習慣では後者の視点移動的な親族語表現がより自然な表現である。このような、相手中心の自称詞には「おじいさん、おばあさん」などもある。この「お父さん、お母さん、おばあさん、おじいさん」は一人称代名詞「わたし」と同じ代名詞的な機能をするもので、鈴木 (1973) も指摘しているように「きみのお母さん、きみのお父さん」などの省略とはいえない。あくまでも視点移動と見た方が正しいと考えられる。以上の外にも甥・姪、弟・妹などの目下の親族に対する「おじさん、おばさん、あに、あね、」などの自称もこの範疇に入る。

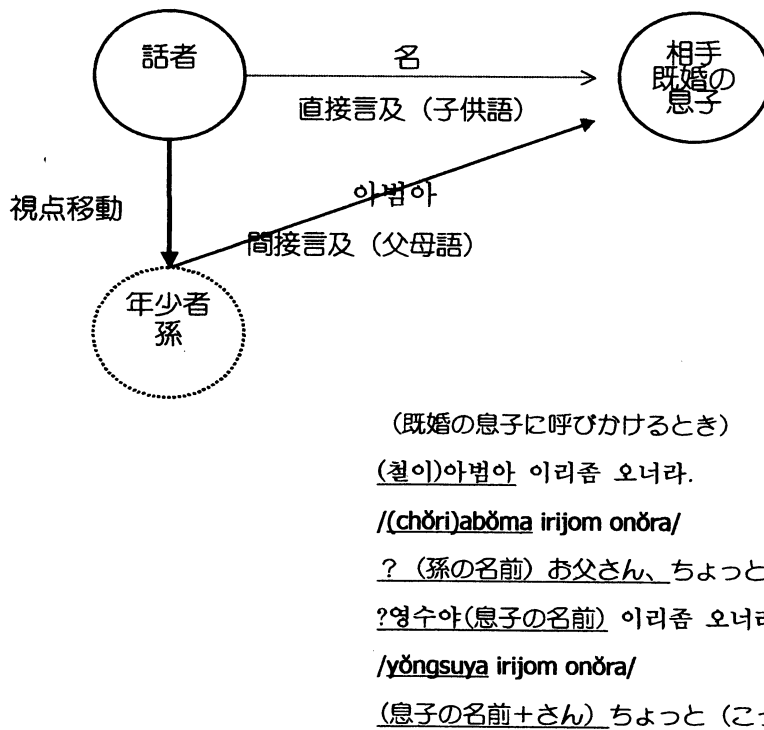
2. 2 第三者中心的視点移動

相手中心的な視点移動の場合、視点を話者から聞き手すなわち相手に移して他者または自分に言及するのに対して、第三者中心的な視点移動では視点を自己から第三者に移して相手に呼びかけたり、言及する。この場合も相手中心の視点移動の場合と同様に第三者が話者と相手より目下の親族になる。それは次の図などで見られるように主に話者の子であり、場合によっては孫にもなる。しかし、第三者中心の視点移動は相手中心の視点移動とは異なって、弟・妹や甥・姪にその視点が移動する表現はない。それは一番近い目下の子供の視点が存在するためだと考えられる。

図Ⅴ：自分の父親に呼びかけるとき（日本語のケース）



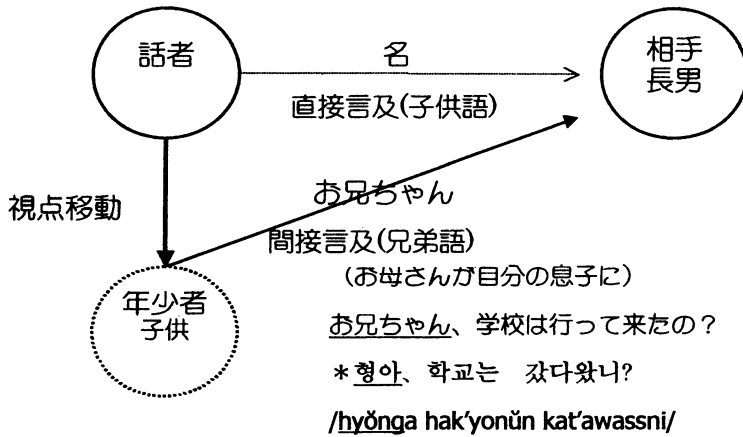
図Ⅵ：自分の息子に呼びかけるとき（韓国語のケース）



図Ⅴのように自分の「父」や「母」を「おじいさん」、「おばあさん」などと呼んだり孫ではなく、他の親族に言及するのも第三者の子供（未成年者）中心的な表現であり、また、韓国語で図Ⅵのように既婚の子供を名前で呼ぶ代わりに「아범아」と呼称するのも孫の視点を通じて呼んでいるのである。

また、図Ⅶ見られるように日本で母親が、自分の長男または長女を、「お兄ちゃん」とか「お姉ちゃん」と呼ぶ習慣も同じ構造であると考えられる。

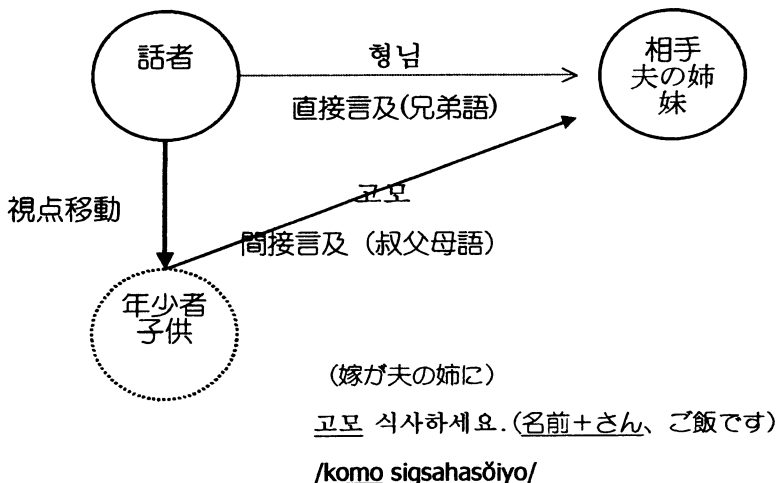
図Ⅶ：お母さんが自分の息子に



この場合、母親は相手を直接自分の立場から見ることをせず、年下の子供の立場を迂回して間接的に捉えて呼んでいるのである⁽⁵⁾。子供の年下の方(弟か妹)は、年上の者を兄または姉の概念を含む言葉で呼ぶ。そこで母親も、当の相手を「お兄ちゃん」、「お姉ちゃん」と呼ぶことになるのであろう。

しかし、韓国語の場合、このような第三者である子供への視点移動の表現は見られない。しかし、図Ⅷのように配偶者の兄弟に対する場合は「叔父・叔母語」を用いることができる。

図Ⅷ：配偶者の姉妹に言及するとき

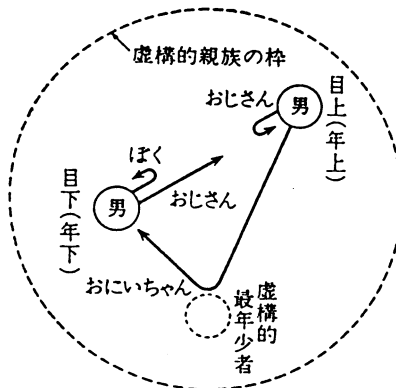


韓国語において、夫の姉妹を「고모/komo/ (おばさん)」、夫の兄弟を「삼촌/samchon/ (おじさん)」などと自分を子供の立場に移動して対象に呼びかけるのは恐らく直接呼びにくい同世代の姻婚の相手を自分の子供の視点に移動して間接的に呼びかける表現方式である⁽⁶⁾と考えられる。話者に子供がいない場合にも、いると想定して呼びかけたりする。

3. 親族名称の虚構的用法

両言語では、人称代名詞の使用が極度に制限されている⁽⁷⁾という事情から、他人を親族名称で呼ぶ習慣は他言語より発達していると言える。鈴木によると、用いられる語彙は、祖父、祖母、おじ、おば、あに、あねの意味を含むものが、もつとも多く、父及び母の概念を含むものは、少なくとも標準的な東京語ではほとんど使われていないようである⁽⁸⁾。韓国語でも「아버지, 어머니」などの父母語は虚構的用法としてほとんど使われていない。その理由は父母年輩の他人に対する「아저씨/ajōssi/, 아주머니/ajumōni/, 아줌마/ajumma/」などの表現が存在しているためだと考えられる。

虚構的用法の原則は、血縁関係のない他人に対し、親族名称を使って呼びかけることで、話し手が自分自身を原点として、相手がもし親族だったら、自分とどの関係に相当するかを考え、その関係にふさわしい親族名称を対称詞または自称詞に選ぶのである。



鈴木孝夫 (1973) 【「人を表すことば」『ことばと文化』岩波書店】より引用

ところで、非親族関係での親族名称の用法に関しては、両言語とも親族名称の虚構的用法が見られる点が共通しているものの、日本語では仲間や知人においてごくわずかな親族

名称が用いられるのに対して、韓国語ではかなり広範な親族名称の使用が見られる。すなわち、親しい先輩や親友の兄弟、親しい上司、年上の職場の仲間、近所の年上の仲間などと話すときも「名前・愛称に親族名称」などをつける組み合わせでそれぞれの相手を把握していることが多い。

次は韓国語における虚構的親族名称の実例である。

話者（女）との間柄	呼称
女の先輩	언니/önni/（お姉さん）
男の先輩	오빠/oppa/（お兄さん）
親友の姉	언니/önni/（お姉さん）
親友の兄	오빠/oppa/（お兄さん）
親友のおじ	아저씨/ajössi/（おじいさん）

渡辺吉銘（1996）【『韓国語の風景』岩波書店】より引用

韓国社会において親族名称が多用される背景には、韓国社会の特有の、実際の年齢差の重視、つまり年上の人物への配慮と韓国人の間の擬制親族意識⁽⁹⁾という二つの大きな原因が関与しているものと考えられる⁽¹⁰⁾。これに対し、年上の相手に対して、日本語では、「苗字+さん」や「肩書き」などで相手のことをとらえることが圧倒的に多い。また、年下のものへの対称詞は「名前+さん・くん・ちゃん」が多い。「お姉ちゃん」、「お兄ちゃん」など親族名称を用いる場合は相手が子供であるときに多い。さらに、対称詞は、虚構的な親族名称の用法よりも、世代差によって規定される親族の年齢階梯語⁽¹¹⁾的用法のほうが多いと考えられる。

虚構的用法としての「おじいさん、おばあさん、おじさん、おばさん、あに、あね」などは自称詞としても対称詞としても用いられ、自称詞として用いる場合は、相手が未成年者の場合が多い。

4.終わりに

以上、両言語における親族名称の視点移動の用法について考察してみた。

日・韓両言語では、家族内の年少者に親族関係形成の原点をおき、その視点からの呼称を他の成員も共有しているという特徴が見られる。このような用法については先に見た役割の確認と心理的同一化という解釈も可能であろう。しかし、韓国語の第三者中心的視点移動においてはその用法の適用範囲から考えて、すなわち、図Ⅶ、Ⅷで見てきたように、家族内の年少者への同一化というよりは、文珉永（1989）が述べているように直接呼称するのが気恥ずかしい同世代の婚姻の相手を自分の子供の視点に移動して間接的に呼びかけ

る表現方式であると考えられる。

また、両言語では親族名称の虚構的用法が見られる。呼称は話し手、聞き手の社会的関係をことばでいちいち確認する作用がある。あたかも同一家族の成員であるかのような呼称を用いることによって、仮の親族関係を打ち立てる作用があるのではないだろうか。このように親族名称の虚構的用法を使うことによってより親近感を感じることができるだろう。

しかし、韓国語ではこれを非親族関係の間でも親しい関係や親しくなりたい関係の人に自分の親族とみなすという擬制親族意識によって用いられているのに対し、日本語では親族意識よりは、社会的意識のほうが強く、それによって年齢階梯語を用いる点にその相違点が見られる。つまり、韓国より日本のほうが親族関係と親族以外の人間関係を分ける傾向が強いと考えられる。

今後、日本語と韓国語の呼称用法を社会言語学的な立場から、両言語使用者を対象としたアンケート調査を行い、その調査結果に基づいて対照を行っていきたい。

注

- (1) 韓国語におけるローマ字表記は、国語語文規定集(1997)「国語のローマ字表記法」による。
- (2) 鈴木(1973)では、自分以外の人の立場を原点として、話者が自己中心語を、しかもそれを明示することなく使うことを、自己中心語の話者中心的用法 (allocentric use) と呼んでいる。
- (3) 鈴木では家庭内で、目上の者が目下の者に直接話しかけたり、言及する時、家族の最年少者の立場から、その相手をみた親族名称を使って呼びかけるという。しかし、本稿で用いた例の場合、必ず最年少者の立場からとはいいがたい。本稿では年少者または未成年者と呼ぶことにする。
- (4) 「子供語」とは両言語で「子供」を意味する語の総称として用いることにする。「父母」「夫婦」「兄弟姉妹」「祖・孫」「叔父・叔母」などの場合も同様である。
- (5) 詳しくは鈴木孝夫(1973)を参照。
- (6) 文璫永 (1989) は、韓国語において夫の姉妹を「고모/komo/」、夫の兄弟を「아주머니/ajubŏni/」と指称することは直接呼称するのが気恥ずかしい同世代の婚姻の相手を自分の子供の視点に移動して間接的に呼びかける表現方式であると述べている。
- (7) 日本語と韓国語は目上に対して使うに人称代名詞が発達していないため、目上の人には、親族名称・職業名が、対等な人と目下には名前・愛称などが人称代名詞の変

わりに使われる。

(8) 鈴木孝夫 (1973)

(9) 韓国では、非親族関係の間でも親しい関係や親しくなりたい関係の人には相手の年齢を推測し、自分の親族と見なすことによって、親族関係成り立てようとする習慣がある。文珮永 (1996)

このような用法を本稿では「擬制親族意識」と呼ぶことにする。

(10) 渡辺吉鎔 (1996) は韓国で親しい先輩や親友の兄弟・親類にあたかも自分の身内のよう呼びかけるのは韓国人の血縁をなによりも大切にしてきた儒教的な心のなごりであると説明している。

(11) 日本語では祖父・祖母、叔父・叔母、兄・姉、娘を意味する個々の親族名称を、それぞれ老人の男・女、それに若い女を意味する年齢階梯語として使用する。

参考文献

- (1) 国語語文規定集(1997)「国語のローマ字表記法」、文化体育部大韓教科書株式会社 (韓国語)
- (2) 鈴木孝夫(1973)「人を表すことば」『ことばと文化』岩波書店
- (3) 文珮永 (1989)「国語新族語彙研究」仁荷大学校大学院博士学位論文
- (4) 渡辺吉鎔 (1996)『韓国語の風景』岩波書店
- (5) 渡辺友左(1978)「親族語彙の全国概観」『日本方言の語彙』三省堂